

情報科学や工学 医療に生かせ

# アジアの頭脳 飯塚に



アジア各国の情報工学分野の研究者が研究成果をパネル展示したシンポジウム会場

情報科学や工学を医療に応用する研究に取り組むアジアの研究者が飯塚市に集う国際シンポジウムが、28日から2日間の日程で始まった。この分野でアジアの研究拠点を目指す九州工業大学のバイオメディカルインフォマティクス研究開発センター（BMIRC、飯塚市）が開設1周年を記念して初めて開催した。

## 九工大が国際シンポ

### きょうまで研究成果発表

国内をはじめインドやシンガポールなど5カ国の研究者や学生など38組

が講演やパネル展示で研究成果を発表。初日は、新薬の開発に使う高性能

コンピュータソフトの製作方法などが紹介された。動物実験や臨床実験の代わりにコンピュータで細胞を再現して実験し、低費用・効率的な新薬開発を可能にするという。

インド工科大学の教授

は「遺伝子」と「代謝」という別々の研究分野を統合する意義を解説。「人間の細胞の働きを忠実に再現することで、精度の高い実験に役立つソフトを作れる」と強調した。

九工大大学院の広瀬英雄教授は、短文投稿サイト「ツイッター」などインターネットを活用し、ノロウイルスなどの感染

症の拡大規模を予測する新システムを紹介。「熱がある」「くしゃみが出る」などの投稿情報を収集して分析することで拡大規模を予測し、より早い時期にワクチンを準備するなどの対策が期待できるといふ。

会場には研究成果をパネルで発表するコーナーもあり、参加者は研究者本人に質問したり、熱心に説明に聞き入ったりしていた。研究開発センターの倉田博之センター長は「アジアのトップレベルの研究者が集まり、互いの刺激になった。センターがアジアの研究拠点になれば、関連企業の誘

致にもつながる」と開催意義を語った。シンポジウムは今後も定期的に行きたいという。

（中野慧）